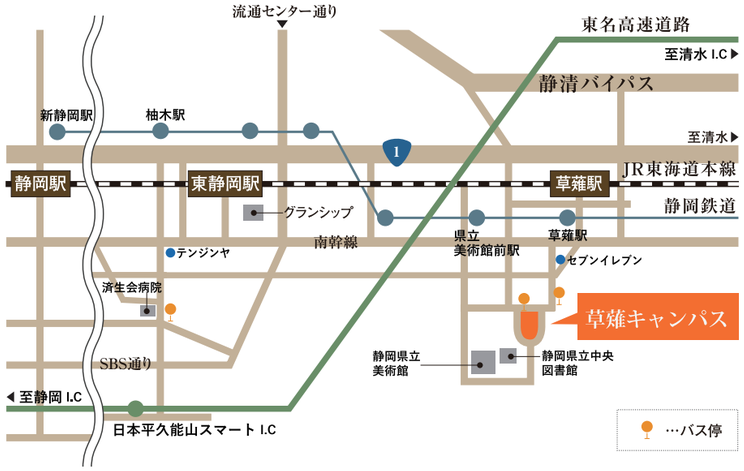
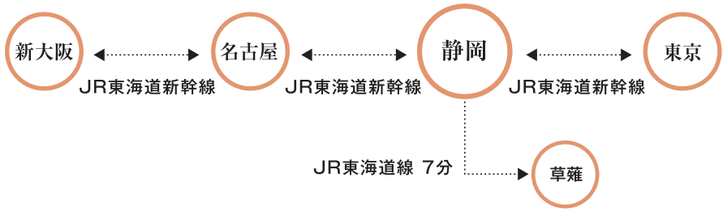
■ ご案内（大学所在地・交通）



● 静岡までのアクセス

●東京から：東京→静岡　約1時間
●大阪から：新大阪→静岡　約2時間
●名古屋から：名古屋→静岡　約1時間
（いずれも「新幹線ひかり号」を使用した場合）



● 最寄り駅から草薙キャンパスへのアクセス

【草薙キャンパス】

徒歩	JR「草薙駅」南口（県大・美術館口）、または静岡鉄道「県立美術館前駅」 静岡鉄道「草薙駅」から徒歩15分
バス	静鉄バス JR「草薙駅」南口（県大・美術館口）バス停から草薙団地行き（三保草薙線）で 「県立大学入口」下車、徒歩5分

静岡県公立大学法人
静岡県立大学
UNIVERSITY OF SHIZUOKA

〒422-8526　静岡県静岡市駿河区谷田 52-1（草薙キャンパス）

TEL　054-264-5102（代表）　054-264-5007（学生部入試室）

https://www.u-shizuoka-ken.ac.jp/

薬学部

CAMPUS GUIDE BOOK 2027

創薬と医療薬学の
スペシャリストを志す君たちへ

静岡県立大学
UNIVERSITY OF SHIZUOKA

広く社会に貢献する静岡県立大学薬学部

熱心努力、
将来にひとつの公道を醸さん

創薬科学と医療薬学における指導的人材の育成

薬学部長　吉成浩一

静岡県立大学薬学部は、1916年に静岡女子薬学校として開学した、日本でも有数の歴史をもつ薬学部です。静岡女子薬学校創設者の岩﨑照吉先生が掲げたモットー「熱心努力、将来にひとつの公道を醸さん」を礎に、幅広い教養と語学力、倫理感、高度な知識と技能に支えられた創薬科学、生命薬学、衛生薬学、臨床薬学、医療薬学ならびにそれらの融合・接合領域で広く活躍し、先導的な役割を果たす人材の育成を理念としています。薬学部では、低学年のうちに物理、化学、生物といった薬の性質や作用などの理解に必要な基礎知識と思考力を身につけます。そして、それらを基盤として衛生薬学、薬理学、薬剤学、疾患学、薬物治療学、臨床薬学といった広範な領域を学修し、それらを相互に結び付けることで、薬を包括的に捉える力を養います。創薬においては、薬のもととなる候補物質の選定、その物質の物理化学的性質の同定、有効性・安全性の評価、生産方法・製剤の最適化、承認申請、製造販売後の調査・試験などさまざまなプロセスが必要とされます。薬学部では、これらの過程に必要な知識や思考力を、多様な学問領域から複合的に学修します。本薬学部では、両学科ともに3年次後期から学生が研究室に配属され、卒業研究に取り組みます。研究課題の設定、研究計画の立案、研究の実施、そして結果の解析と考察を通して、研究能力を身に付けるとともに、批判的および俯瞰的思考力によって課題を見出す力を涵養します。4年制の薬科学科では、ほぼすべての学生が大学院へ進学し、創薬・生命薬学分野の研究者や、製薬・化学関連の高度技術者に求められる資質と能力を修得します。6年制の薬学科を卒業して臨床の道に進んだ場合でも、卒業研究を通じて培われたリサーチマインドが臨床現場で大いに役立ちます。アドミッションポリシーやディプロマポリシーを理解したうえで、希望する進路や自分の適性にあった学科を選択し、健康長寿の推進に貢献できる薬のプロフェッショナルを目指してください。

創立100年を超える歴史と伝統

1916　岩﨑照吉（1871〜1925）により「静岡女子薬学校」として創立
1945　「静岡女子薬学専門学校」が設立
1953　「静岡薬科大学」が開学
1987　「静岡県立大学薬学部」に組織変更
2002　文部科学省COEに採択　※Center of Excellenceの略称で優れた研究拠点を意味する
2004　「創薬探索センター」の設置
2006　静岡県立大学薬学部学科改変、「4年制薬科学科」と「6年制薬学科」を設置
2007　文部科学省グローバルCOEに採択
2013　「薬食研究推進センター」の設置
2014　文部科学省「地（知）の拠点整備事業（大学COC事業）」に採択
2016　静薬創立100周年記念事業施行
2017　「谷田キャンパス」から「草薙キャンパス」に名称変更
2018　モバイルファーマシーの設置
2019　「内西いよ子奨学金制度」が開始
「薬学キャリアデザイン近藤寄附講座」の開設
2021　文部科学省「ウィズコロナ時代の医療人材養成事業」に採択

岩﨑賞

学部卒業生の中から、成績優秀者に岩﨑賞が授与され、勉学の努力が讃えられます。この賞は静岡県立大学薬学部の前身、静岡女子薬学校の初代校長、岩﨑照吉氏に因んで名づけられました。

「医療を通じて人類の健康に貢献する総合科学としての薬学を通して社会に貢献する人材を育成する」という理念のもとに、研究者、薬剤師や高度専門職業人の養成・育成を目指します。

学位授与の方針　ディプロマ・ポリシー

薬科学科（4年制）

薬科学科では、創薬科学及び生命薬学の研究領域でグローバルに貢献でき指導的役割を担える人材の育成を教育目標として掲げており、以下に示した資質を身につけ所定の単位を修得した学生に卒業を認定し、学士（薬科学）の学位を授与します。

1. 幅広い教養と語学力	●多様な薬科学分野で活躍するための広範で深い教養を身につけている。 ●グローバルに活躍できる語学力とプレゼンテーション能力を有し、研究者・技術者として国際社会並びに地域社会に貢献する能力を身につけている。
2. 科学者としての倫理観	●生命の尊厳を守るための強い倫理観と豊かな人間性を身につけている。 ●社会や公益に対する研究活動の責任・使命を理解し、薬科学に携る者として健全な科学倫理観を身につけている。
3. 高度な知識と技能	●物理学・化学・生物学を基盤とする薬学的基礎知識・技能とその応用展開能力を身につけている。 ●創薬・生命薬学研究に必要な複数の薬学専門領域に関する知識・技能を体系的に身につけている。
4. 独創性と問題解決能力	●創薬・生命薬学研究者に求められる独創性や問題解決の基礎的な能力を身につけている。 ●創薬・生命薬学研究を自ら計画・遂行する知識及び技術的基盤を身につけている。
5. 自己研鑽	●創薬・生命科学に関わる研究者として、常に自己を評価・省察し、さらに自らを高める意欲を身につけている。 ●次世代を担う人材を育成する意欲と態度を身につけている。

薬学科（6年制）

薬学科では、医療や健康増進に貢献する指導的立場の薬剤師や医療薬学に根ざした研究を推進できる人材の育成を教育目標として掲げており、以下に示した資質を身につけ所定の単位を修得した学生に卒業を認定し、学士（薬学）の学位を授与します。

1. 幅広い教養と語学力	●医療人に求められる高い教養を身につけている。 ●グローバルに活躍できる語学力を有し、国際感覚を身につけている。
2. 医療人としての倫理観とコミュニケーション能力	●生命倫理及び患者の人権を最優先するという強い倫理観を身につけている。 ●患者の命を守るという強い責任感・使命感を身につけている。 ●医療人として必要なコミュニケーション能力を身につけている。
3. 高度な知識と技能	●基礎科学に裏打ちされた最先端の知識と技能を有している。 ●情報共有及び課題解決に必要な能力を身につけている。
4. 高い臨床能力	●医療現場で遭遇する様々な問題を発見・解決する臨床的な能力を身につけている。 ●薬物療法を提案・遂行する能力を身につけ、チーム医療に貢献できる。 ●医療薬学に根ざした研究を計画・遂行する能力を身につけている。
5. 自己研鑽	●医療人として、常に自己を評価・省察し、さらに自らを高める意欲を身につけている。

入学者の受け入れに関する方針　アドミッション・ポリシー

薬科学科

倫理観を含め大学人としての教養を身につけ、世界に通用する語学力を養うとともに、薬学の基盤となる知識とその応用展開能力を醸成し、医薬品の研究・開発で活躍できる人材の育成に努めています。また、大学院への進学を想定して、創薬・生命薬学研究を担う創造力豊かな研究者や高度専門職業人の養成を目指しています。これらの教育目標及び方針に立脚し、健全な倫理観を備え、薬学人として社会に貢献したいという強い信念と情熱を持ち、学習意欲と科学的探求心を有し、社会のニーズに柔軟に対応できる創造力と論理的思考力を有する人材を歓迎します。加えて、基礎薬学に軸足を置き、物理学・化学・生物学を基盤とした創薬研究や生命薬学研究に高い集中力で取り組める学生を求めています。

薬学科

倫理観を含め大学人としての教養を身につけ、世界に通用する語学力を養うとともに、薬学の基盤となる知識とその応用展開能力を醸成し、医療現場で活躍できる人材の育成に努めています。また、医療の担い手として貢献する指導的立場の薬剤師や医療薬学領域の研究者の養成を目指しています。これらの教育目標及び方針に立脚し、健全な倫理観を備え、薬学人として社会に貢献したいという強い信念と情熱を持ち、学習意欲と科学的探求心を有し、社会のニーズに柔軟に対応できる創造力と論理的思考力を有する人材を歓迎します。加えて、医療や薬物治療に対する問題意識を常に持ち、他者と意見交換しながら論理的に問題解決へ向けて取り組む学生を求めています。

薬科学科（4年制）

創薬科学者への道を開く

4年制の学科で、「薬」を中心としたサイエンスを学び、ライフサイエンスの研究者・技術者としての基礎的能力の涵養をはかります。大学院に進学することで、製薬企業や大学で研究・開発に携わる人材、行政従事者や医薬情報担当者など幅広く活躍できる人材を養成しています。
本学では、まず一般教養科目、基礎薬学科目を履修した後、薬の科学に関する専門科目を履修します。主として医薬品の創製、研究開発、製造に関する基礎教育に重点をおいた学科ですが、生命科学や環境科学に関する専門分野を合わせ持つ総合的な学科です。薬科学科は有機化学、物理化学、生物化学の基礎のうえに成り立っており、創薬科学大講座、生命薬科学大講座から組織されております。また、薬草園、創薬探索センター、および薬食研究推進センターを関連施設として持ちます。これら講座、研究室などによる教育・研究活動により、「創薬」の新たな基盤構築に貢献することを目指しています。

取得可能資格

・臨床検査技師 受験資格
※定員を超えた場合、主に成績を考慮した選抜を行います。

薬学科（6年制）

高度医療を担う薬剤師・医療薬学研究者を目指す

6年制の学科で、薬剤師に必要な薬学の基礎知識と技能を学び、医療人としての倫理観と強い使命感の涵養をはかります。科学に立脚した最先端の薬物治療を行う能力を身につけさせることで、医療や健康増進に貢献する指導的立場の薬剤師や、医療薬学領域の研究者を育成しています。薬剤師国家試験受験資格は、薬学科の卒業生のみに与えられます。
薬学科では、基礎科学教育とともに教養教育、医療薬学教育および実務実習が行われます。実務実習は、主に静岡県下の病院・薬局および静岡県立総合病院内の「薬学教育・研究センター」において、指導薬剤師の協力を得て実施しています。
薬学科の卒業生は、病院、薬局や、官公庁などに薬剤師として医療のみならず保健衛生や薬務行政に従事するほか、製薬、食品、化粧品などの産業分野での活躍や、大学院に進学し研究分野で活躍することが期待されます。

医療現場に実務教育・研究拠点を設置

静岡県立総合病院内に設けられた「薬学教育・研究センター」では、臨床の現場に密着した医療薬学領域の研究を進める環境と研究設備が整えられています。このような充実した研究環境のもと、個別薬物治療研究分野の発展に寄与できる医薬融合型研究を目指しています。本学科では、「創薬」・「育薬」を指向したトランスレーショナル・リサーチとしての臨床試験にかかわる実習・研究も実施しています。

取得可能資格

・薬剤師 受験資格
・臨床検査技師 受験資格
※卒後に臨地実習12単位を取得する必要があります。

薬科学科 ／ 組織と教員

創薬科学大講座

医薬品化学分野
※教授　眞鍋敬
※講師　岩本憲人
※助教　山口深雪

生命物理化学分野
※教授　橋本博
※准教授　原幸大
※講師　菱木麻美
※助教　渕上壮太郎

医薬品創製化学分野
※教授　濱島義隆
※准教授　江上寛通
※助教　山下賢二

大学院付属施設

創薬探索センター
※教授　浅井章良
※准教授　澤田潤一
※講師　小郷尚久
※助教　村上央

薬食研究推進センター
※特任教授　山田静雄
※講師　伊藤由彦

生命薬科学大講座

免疫微生物学分野
※教授　梅本英司
※准教授　大橋若奈
※講師　中西勝宏
※助教　岡村洋

統合生理学分野
※教授　原雄二
※准教授　土谷正樹
※助教　村上光
※助教　平野航太郎

薬学キャリアデザイン近藤寄附講座

（※講師　米澤正）

茶健康科学講座

※特任教授　山田浩
※特任助教　河合保枝

付属施設

薬草園
（※教授　渡辺賢二）

薬学科 ／ 組織と教員

医療薬学大講座

薬剤学分野
※教授　尾上誠良
※准教授　佐藤秀行
※助教　山田幸平

創剤科学分野
※教授　近藤啓
※講師　照喜名孝之
※助教　畑中友太

生体情報薬理学分野
※教授　黒川洵子
※講師　児玉昌美
※助教　清水聡史

分子病態学分野
※教授　細岡哲也
※准教授　刀坂泰史
※講師　砂川陽一
※助教　伊美友紀子

臨床薬学大講座

薬学教育・研究センター

臨床薬剤学分野
※教授　辻大樹
※講師　横山匡
※助教　上野翔平
（※助教　谷澤康玄）

薬局管理学分野
※助教　谷澤康玄

臨床薬効解析学分野
※教授　内野智信
※助教　杉山恭平

医薬品情報解析学分野
※講師　伊藤由彦

実践薬学分野
※教授　内田信也
※准教授　安室修
※講師　三浦基靖
※助教　河本小百合

生体機能薬学大講座

衛生分子毒性学分野
※教授　吉成浩一
※准教授　志津怜太
※助教　大岡央
※助教　鈴木祥菜

生化学分野
※教授　竹内英之
※准教授　高橋忠伸
※講師　紅林佑希
※助教　塚本庸平

薬理学分野
※教授　川畑伊知郎
※准教授　木村俊秀
※講師　金子雪子
※助教　山口桃生

医薬生命化学分野
※教授　浅井知浩
※准教授　小出裕之
※講師　米澤正
※助教　疋田智也

身体運動科学分野
准教授　窪田辰政

科学英語分野
※准教授　ホーク フィリップ（Philip HAWKE）

分子薬学大講座

医薬品製造化学分野
※教授　滝田良
※准教授　吉村文彦
※助教　近藤健
※助教　緩鹿創太

生薬学分野
※教授　渡辺賢二
※准教授　佐藤道大
※助教　渡邉正悟

生体機能分子分析学分野
※教授　轟木堅一郎
※准教授　兒島憲二
※助教　古庄仰

注 ※印　大学院薬学研究院教員兼務、（　）は兼務

個々の力を最大限に引き出す 教育課程

4年制薬科学科（創薬科学）と
6年制薬学科（医療薬学）による指導的人材の育成

薬学部概略チャート

1年次から3年次では、多くの科目を両学科共通で学びます。
薬学の基礎や専門科目を学び、深く理解し、
より専門的な学習に備えます。

薬科学科

入学

1年次 2年次 3年次 4年次

研究室配属

臨床検査技師の業務を、医療の現場で2ヶ月間学ぶことができます。

臨地実習

卒業論文発表会

臨床検査技師国家試験

1年次 2年次

大学院
博士前期課程

1年次 2年次 3年次

大学院博士後期課程

薬学科

入学

病院・薬局での実務実習を履修するには、薬学共用試験と呼ばれるCBT(知識に関する試験)とOSCE(技能・態度に関する試験)の両方に合格することが必要です。

1年次 2年次 3年次 4年次 5年次 6年次

研究室配属

共用試験

薬剤師の業務を、医療の現場で5ヵ月間学ぶことができます。

病院実習
薬局実習

卒業論文発表会

薬剤師国家試験

1年次 2年次 3年次 4年次

大学院博士課程

卒業後の進路

薬科学科を卒業すると、薬学の知識を生かして製薬企業などの技術職やMR（医薬情報担当者）、あるいは公務員に就くことができます。大学院薬食生命科学総合学府の博士前期課程（2年間）、あるいはさらに博士後期課程（3年間）に進学し、薬学の研究を深め、大学の教育研究職や企業・公的研究機関などの研究職を目指すことができます。

卒業後の進路

薬学科を卒業すると、薬剤師の資格を生かして、病院や薬局の薬剤師や医療・薬事行政の職に就くことができます。あるいは製薬会社などの企業に就職します。
また、大学院薬食生命科学総合学府博士課程の薬学専攻（4年間）に進学し、薬学の研究を深めることができます。博士課程を修了すれば、薬学部教育研究職、製薬企業や公的研究機関など、より高度な研究職の道が開けます。

あなたが化ける、薬学 修得のステージ

基礎教育から実務実習まで、多彩なカリキュラムから
自らの興味・関心に合わせて選択できます。
「薬科学科」「薬学科」のいずれの学科においても
学生が主体的に将来につながる道を歩めるようにしています。

薬科学科

薬学科

START

1年次

数理・データサイエンス・AI入門
フレッシュマンイングリッシュ IA～IIB

物理学	**身体運動科学**
基礎化学	**命と倫理**
数学 I・II	**科学演習**
統計学	**分析化学 I・II**
薬学概論	**生物化学 I・II**
無機化学	**公衆衛生学**
有機化学 I	**機能形態生理学 I**
物理化学 I・II	**臨床薬学演習 I（薬学科のみ）**
早期体験実習	

教養科目
（地域、言語、薬、食品栄養、看護、経営情報、国際関係などの分野を扱った93科目から選択）

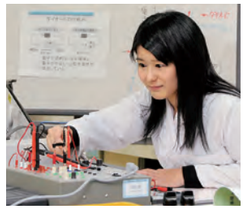
1年次には、英語、物理、化学、生物、数学などに関連した基礎科目が開講されます。またパソコンを利用し科学的議論を行うためのスキルを学んだり、実際にディベートを行ったりする科学演習が開講されます。いくつかの専門科目も開講され、その中でも薬学概論は薬に関わる専門家として必要とされる知識、技能の概要を捉え、医療、創薬、薬務行政における薬学の役割、薬剤師の使命を理解することを目的としています。

1年次には多くの教養科目が開講されていて、自分自身で選択して受講することで知識・見聞を広げられます。中でも「しずおか学」として「静岡の防災と医療」、「茶学入門」、「静岡フィールドスタディ」などといった静岡に関連した科目も受講することができます。

2年次

英語コミュニケーションI・II
英語コミュニケーションIII・IV

海外英語研修	**衛生薬学 I・II**
有機化学 II～IV	**放射化学**
生薬学	**機能形態生理学 II・III**
物理化学 III	**薬理学 I・II**
生物物理化学	**製剤学**
生物化学 III・IV	**薬剤学**
微生物学	**薬物動態学 I**
免疫学	**臨床検査学**
物理系薬学実習	**早期体験実習**
生物系薬学実習 I・II	**臨床薬学演習 II（薬学科のみ）**
化学系薬学実習 I・II	



2年次には、物理系薬学、化学系薬学、生物系薬学、薬剤・製剤学をより深く学ぶための専門科目が開講されます。さらに物理系、生物系、化学系の専門実習が開講され、薬学を学ぶために必要な高度な実験操作・技術およびデータ整理・解析に関連する知識、技能、態度の習得を目指します。

薬学に関連した学術誌、雑誌、新聞の読解、および医療現場、研究室、学術会議などで必要とされる実用的英語力を身につけるために、科学英語の基本的知識と技能を修得し、生涯にわたって学習する習慣を身につけましょう。

1年次から3年次までのカリキュラムは、学年進行に伴い基礎科目から専門科目への比重が変化していくように工夫されています。また、薬学生として学習に対するモチベーションを高めるために「早期体験実習」が2年次までに開講されており、薬学部の研究室訪問、病院見学、薬局見学、企業の研究所訪問をしています。

3年次

薬学英語

薬品分析化学	**毒性学**
創薬科学	**医薬品安全性学**
薬理学III・IV	
医療系・生物系薬学実習	**総合薬科学研究**
薬剤系薬学実習	医用工学実習
医薬化学	薬物療法学 I・II
有機合成論	疾患学 I・II
薬品製造論	創剤工学
微生物薬品学	薬学と社会 I
漢方薬学	医薬品情報学 I・II
遺伝子工学	遺伝子診断学
糖鎖生物学	生物統計学
薬物動態学 II	医動物学
臨床検査事前臨地実習	生理検査学に関する臨床検査臨地実習
生理検査学以外の臨床検査臨地実習	筋生理学

3年次には、より薬学を深く学ぶための専門科目が開講されます。さらには医療薬学を中心とした専門科目が開講され、病態、薬物治療や臨床試験に関する講義が用意されています。専門実習科目として新たに医療系薬学実習が加わります。

3年次

薬学英語

薬品分析化学	**毒性学**
創薬科学	**医薬品安全性学**
薬理学III・IV	
医療系・生物系薬学実習	**総合薬学研究**
薬剤系薬学実習	医用工学実習
漢方薬学	**疾患学 I・II**
薬物動態学 II	**薬学と社会 I**
薬物療法学 I・II	**医薬品情報学 I・II**
創剤工学	**遺伝子診断学**
医薬化学	遺伝子工学
有機合成論	糖鎖生物学
薬品製造論	生物統計学
微生物薬品学	医動物学
臨床薬学演習 III	**実務事前実習**
	筋生理学

薬科学科

4年次

総合薬科学研究

医薬品製造開発論
臨床薬物動態学
薬物療法学 Ⅲ
薬学と社会 Ⅱ
医薬品情報学 Ⅲ
医療とコミュニケーション学
調剤学
イングリッシュ リサーチ プレゼンテーション
疾患学 Ⅲ
臨床医学総論
医用工学概論
臨床検査総論
臨床生理学
臨床検査事前臨地実習
生理検査学に関する臨床検査臨地実習
生理検査学以外の臨床検査臨地実習

4年次では総合薬科学研究が中心科目となります。各研究室で行われた研究の成果は卒業論文としてまとめられ、発表会が行われます。また、専門科目は全科目が選択となり、自分自身の興味・関心によって自由に履修することができます。

教員の指導の下で研究に関連した論文を読み、最新の研究機器を駆使した実験に取組み、学部生生活の中で最も充実した時を過ごすことになります。長期間にわたる研究活動に取り組むことになり、そのためには健康な心身と強靭な意志力が不可欠です。

卒業論文発表会

研究室に配属され、そこで取り組んできた卒業研究の成果を発表します。薬科学科の学生は、4年次に卒業論文の作成と発表を行います。薬学科の学生は、4年次に卒業研究中間発表、6年次に卒業論文の作成と発表を行います。そのため、プレゼンテーション能力はもちろん、自分の研究に対する客観的な自己評価能力も養われます。

卒業研究は、問題解決能力を身に付けるための大変重要な機会となっています。何が問題かに気づき、調べる能力、その問題を解決するための方法を考える能力、解決方法を実行する能力を身に付けられるよう、日々の研究活動を行っています。

卒業研究

全員が研究室に所属し、卒業研究を行います。卒業研究は学生実習とは大きく異なり、未知なるもの、世界の科学や医療の進歩に貢献できるものを探求する、独創的かつ学術的な研究です。

薬学科

4年次

臨床薬学演習 Ⅳ
実務事前実習
薬学と社会Ⅱ
医薬品情報学 Ⅲ
医療とコミュニケーション学
臨床薬物動態学
医薬品製造開発論
臨床医学総論
臨床検査総論
イングリッシュ リサーチ プレゼンテーション
総合薬学演習
総合薬学研究
薬物療法学 Ⅲ
疾患学 Ⅲ
調剤学
症候学
医用工学概論
臨床生理学

4年次には、患者の病態の理解と服薬指導を行うために不可欠である症例検討についての知識および技術を身に付けるため、少人数PBL（Problem-Based Learning）チュートリアル学習による臨床薬学演習が用意されています。また実務事前実習で、実務実習で必要とされる技能および態度を身に付けます。

5年次

臨床薬学演習 Ⅳ　**総合薬学演習**

病院実務実習
薬局実務実習

総合薬学研究　**静岡救命連携演習**
イングリッシュ リサーチ プレゼンテーション
アドバンスト実務実習-地域医療・国際医療・臨床薬学

5年次には、それぞれ11週間の病院実務実習、薬局実務実習を行うことになります。これには4年次で薬学共用試験を受験し合格することが必須となります。実務実習を通し、薬剤師に必要な医療人としての態度や調剤業務に必要な知識・技能・態度を医療現場において習得します。

6年次

臨床薬学演習 Ⅳ　**総合薬学演習**
総合薬学研究
静岡救命連携演習
イングリッシュ リサーチプレゼンテーション
アドバンスト実務実習-地域医療・国際医療・臨床薬学

国家試験対策

6年次には、これまで履修してきた科目の統合型学習として、医薬品の探索、合成、構造活性相関、薬理作用、臨床応用、体内動態、副作用、相互作用などについて調査および発表を行う総合薬学演習が用意されています。

6年次には、4年次学生の臨床薬学演習にチューターとして参加することによって問題解決能力に更に磨きをかけられます。また、卒業論文の作成・成果発表や国家試験に向けて、多忙ながら充実した時間を過ごしています。

薬学部 講座・研究分野

注 ※印　大学院薬学研究院教員兼務

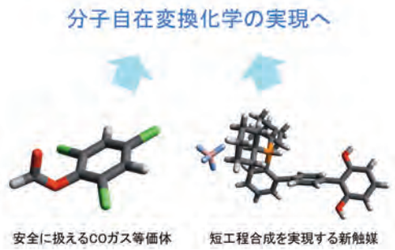
薬科学科 医薬品化学分野

※教授　眞鍋敬　　※講師　岩本憲人
※助教　山口深雪

HP▶ https://w3pharm.u-shizuoka-ken.ac.jp/yakka/

分子を自在に変換する化学を開拓する

化学反応を理解しコントロールすることは、医薬品をはじめとする有用物質の効率的な化学合成に必要不可欠です。もし分子を思うがままに変換できるようになれば、現在の化学合成法を根本から改良することができ、理想的な方法を確立することができます。当分野では、このような「分子自在変換化学」の開拓を目指して、有用物質の化学合成法を研究しています。また、新機能性物質・生理活性物質の合成・開発研究も行っています。



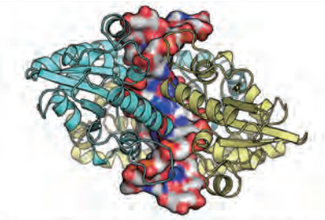
薬科学科 生命物理化学分野

※教授　橋本博　　※准教授　原幸大
※講師　菱木麻美　　※助教　渕上壮太郎

HP▶ https://w3pharm.u-shizuoka-ken.ac.jp/bukka/

タンパク質の「はたらき」を「かたち」から理解する

タンパク質は適切な「かたち」をとることで正しく働くことができます。かたち（構造）とはたらき（機能）には密接な関係があり、タンパク質の機能を理解するには、構造を知る必要があります。さらに、構造から機能を理解出来れば、機能を制御する分子の創製、すなわちドラッグデザインが可能になります。当分野では、生物学的に重要なタンパク質や創薬ターゲットになるタンパク質の実験科学と計算科学の手法を用いた構造研究を行うことで、病気になる原因や医薬品設計の手がかりを得ることを目指しています。


X線解析で決定したDNAを切断するタンパク質の構造
青と黄色の分子がDNAをつかんで切る様子がわかる

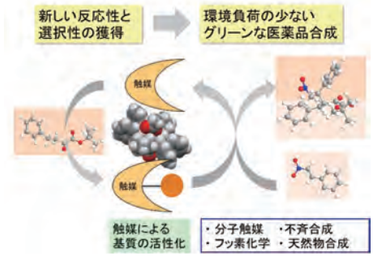
薬科学科 医薬品創製化学分野

※教授　濱島義隆　　※准教授　江上寛通
※助教　山下賢二

HP▶ https://w3pharm.u-shizuoka-ken.ac.jp/Isocus/

新しい分子と機能をつくり出す有機化学

有機化学は分子を「つくる」学問ですが、この「つくる」にはふたつの意味、すなわち、「作る」と「創る」が込められています。医薬品は人類の幸福に資するものであり、その化学合成には地球環境の向上も託されています。グリーンな医薬品合成の実現には分子触媒による新規反応性と選択性の獲得が必要です。私たちはその目標を達成するためのヒントを生体内に求め、生体のしかけを利用した人工的な分子変換システムにより分子を効率的に「作る」ことを目指しています。また、その技術を活用することで、生体内に存在しない元素の特性を活かした分子設計を行い、人工機能を付与した生体関連分子を「創る」研究も行っています。



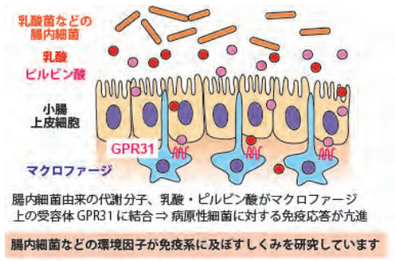
薬科学科 免疫微生物学分野

※教授　梅本英司　　※准教授　大橋若奈
※講師　中西勝宏　　※助教　岡村洋

HP▶ https://w3pharm.u-shizuoka-ken.ac.jp/immunol/

生体環境を重視した免疫学

腸内細菌や食事などの環境因子に絶えず晒される腸管では、病原体を排除しつつ常在細菌に過剰に反応しないための独自の免疫制御機構が発達しています。当研究室では主に腸管組織における免疫細胞の機能や、腸内細菌や食事などの環境因子が免疫系に与える影響を研究しています。特に常在細菌により産生される代謝分子やその受容体シグナルの役割を解析し、このような代謝分子に対する受容体の機能を制御することで新たな薬剤開発を目指しています。



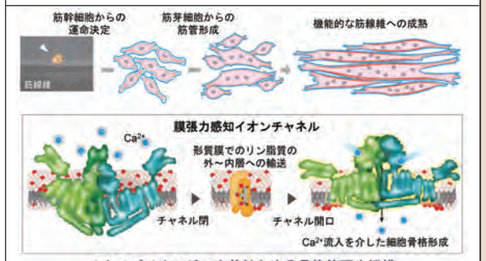
薬科学科 統合生理学分野

※教授　原雄二　　※准教授　土谷正樹
※助教　村上光　　※助教　平野航太郎

HP▶ https://w3pharm.u-shizuoka-ken.ac.jp/physiol/

「力（ちから）」から俯瞰する生体機能

生体を構成する細胞は、周辺から掛かる物理的な力（ちから）を適切に感知することで機能しています。当分野では、細胞に掛かる力がいかに生体組織の形態・機能に関わるのかを解明する「メカノバイオロジー」研究を基軸として、生体恒常性維持およびその破綻に伴う疾患発症の機序解明を目指しています。特に骨格筋に内在する幹細胞がいかに力を感知して、秩序だった骨格筋再生をもたらすか明らかにすることで、われわれ人類の願いである健康長寿の実現を目標に研究を推進しています。



メカノバイオロジーを基軸とする骨格筋再生機構

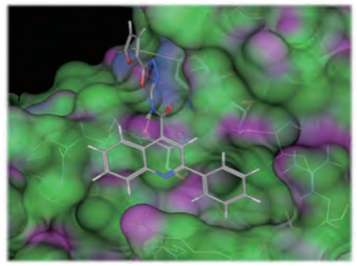
薬科学科 創薬探索センター

※教授　浅井章良　　※准教授　澤田潤一
※講師　小郷尚久　　※助教　村上央

HP▶ https://w3pharm.u-shizuoka-ken.ac.jp/tansaku/

HOPE & HELPを目指した創薬研究

近年の腫瘍分子生物学の目覚ましい進展によりがん細胞が巧妙な手口で成長しヒトを蝕むメカニズムが、遺伝子やタンパク質レベルで明らかになってきました。つまりがんとの闘いに勝つ為の新しい戦略を練ることができる時代になってきたのです。当研究室では勝つために相手を知る、つまりがんについて皆で学び理解を深めることにより、がんのアキレス腱を狙った新薬の研究開発に取り組んでいます。今なお増え続けるがん患者さんにとってのHOPE & HELPを目指します。



バラエティーに富んだ講座・研究分野で
最先端の研究を経験。

薬学部　講座・研究分野

注 ※印　大学院薬学研究院教員兼務

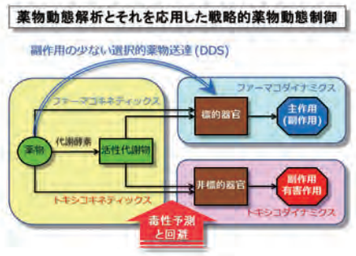
薬学科　薬剤学分野

※教授　尾上誠良　　※准教授　佐藤秀行
※助教　山田幸平

HP▶ https://w3pharm.u-shizuoka-ken.ac.jp/yakuzai/

薬剤学で「クスリ」の「リスク」を回避する

医薬品や機能性食品の中には優れた薬効や機能性を持っていても、吸収性、安定性および安全性等の問題により十分に活用できていないものがあります。これらの化学物質の薬効・機能性の向上や副作用リスクの回避を達成するには、適切に薬物動態を制御しうる投与形態を設計し、投与されてから効果・副作用発現に至るまでの薬物動態を正確に予測・解析することが重要です。当分野では、効果的かつ安全な薬物治療に貢献すべく、様々な薬剤科学的技術を発展的に応用した研究を展開しています。



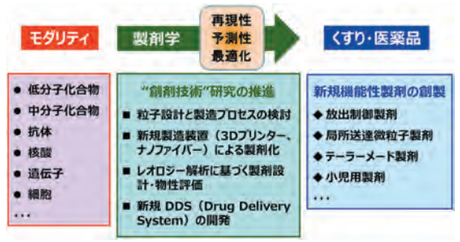
薬学科　創剤科学分野

※教授　近藤啓　　※講師　照喜名孝之
※助教　畑中友太

HP▶ https://w3pharm.u-shizuoka-ken.ac.jp/pharmeng/

“創剤技術”を駆使した剤形で新しい価値を創る

くすり・医薬品という言葉から多くの方は錠剤やカプセル剤といった剤形を想像することでしょう。剤形を創り出す創剤技術を研究する製剤学はユーザーに近い学問です。最近は従来の低分子化合物に加え、中分子化合物、抗体、核酸、遺伝子、細胞等の様々な“モダリティ”が注目されていますが、ユーザーが使用できるくすり・医薬品にしなければ薬物治療は達成されません。創剤技術を駆使し、“モダリティ”の特徴を最大限に引き出すくすり・医薬品を開発することで新たな価値を創造することに挑戦しています。



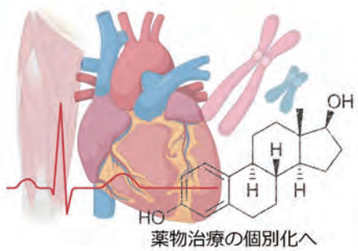
薬学科　生体情報薬理学分野

※教授　黒川洵子　　※講師　児玉昌美
※助教　清水聡史

HP▶ https://sites.google.com/view/kendaibip/

薬物作用の個人差を理解する

超高齢化時代の到来により慢性・加齢性疾患が急増しています。それにより高騰する医療費を削減するため、薬物治療における個別化が喫緊の課題となっています。当分野では、この社会的要請に応えるべく、疾患の発症過程および薬物作用における個人差を遺伝子・分子レベルで理解し、その情報を薬物治療法に反映させることを目指しています。薬物受容体・イオンチャネル・トランスポーターに作用する薬物を中心に、性別・年齢・栄養状態・病態などの内的因子による影響を科学的に解明することを目指しています。



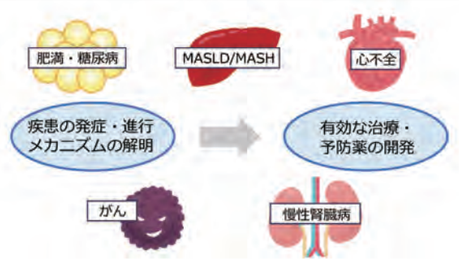
薬学科　分子病態学分野

※教授　細岡哲也　　※准教授　刀坂泰史
※講師　砂川陽一　　※助教　伊美友紀子

HP▶ https://w3pharm.u-shizuoka-ken.ac.jp/byoutai/

代謝疾患や心不全に対する新たな治療薬の開発

生活様式の大きな変化にともない肥満や糖尿病、代謝機能障害関連脂肪肝炎（MASH）などの代謝疾患やがん、心不全などが増加し、医学的・社会的に大きな課題となっています。分子病態学分野では、これらの疾患を対象とし、新しい治療薬の開発を目標とした疾患の分子病態の解明のための基礎研究と医療応用を目指す臨床研究を展開しています。具体的には、分子生物学および遺伝子工学的手法を用いて病態制御に重要な分子を同定し、その分子を標的として薬学的・栄養学的アプローチにより新たな治療法の開発のための基礎・臨床研究を進めています。



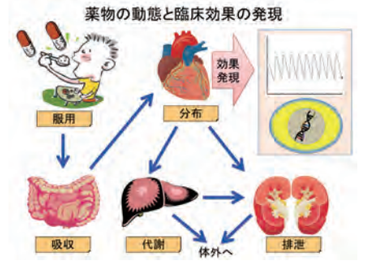
薬学科　臨床薬剤学分野

※教授　辻大樹　　※講師　横山匡
※助教　上野翔平　　※助教　谷澤康玄（薬局管理学分野）

HP▶ https://w3pharm.u-shizuoka-ken.ac.jp/rinyaku/

医療現場の疑問を薬学的視点と手法で解決する

医薬品の適正使用を図る上で、医療現場には未解決の問題点が数多くあります。それらを臨床の視点で研究シーズとして捉え、薬学的手法で解決に導き、薬物療法の治療成績や患者QOLの向上につなげる研究をしています。すなわち、薬物動態学的アプローチを駆使して、抗がん薬や認知症治療薬などの体内動態と臨床効果や副作用/有害事象との関係を検討し、その成果を臨床現場にフィードバックしています。静岡県立総合病院先端医学棟内にも研究室を備え、医療現場との共同研究を積極的に展開しています。



薬学科　臨床薬効解析学分野

※教授　内野智信　　※助教　杉山恭平

HP▶ https://w3pharm.u-shizuoka-ken.ac.jp/clinphar/

薬剤師主導の臨床研究でエビデンスの創出を行う

近年、薬剤師は多方面への進出により、臨床現場において新たな問題点との遭遇が増えています。当研究室では、薬剤師の視点から問題解決を行う薬剤師主導の臨床研究を立ち上げ、その成果を臨床現場にフィードバックするために実験的検証やデータ解析を行い、エビデンスの創出を行います。現在は、皮膚疾患患者の角層構造・成分解析による皮膚バリア機能の解明に関する研究や、薬物動態、耐性化、常在菌叢変化を統合的に解析し、科学的根拠に基づく抗菌薬治療の最適化に関する研究に注力しています。

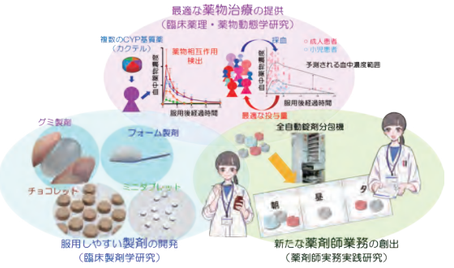
薬学科　実践薬学分野

※教授　内田信也　　※准教授　安室修
※講師　三浦基靖　　※助教　河本小百合

HP▶ https://w3pharm.u-shizuoka-ken.ac.jp/jissen/

ベッドサイドに優れた薬剤師と薬物治療を届ける

実践薬学分野は患者さんと医療スタッフから信頼され、患者ベネフィットを追求できる人材育成を目指しています。また患者さんへの直接的な貢献を目標として研究に取り組んでいます。服用しやすい製剤など臨床の点から製剤を開発・評価し、アドヒアランス向上を目指した臨床製剤学研究や、基礎及び臨床研究から様々な薬物の血中濃度と効果の関係を解析し、最適な薬物治療を提供するための臨床薬理・薬物動態学研究を行っています。さらに新たな薬剤師業務の創出を目的とした薬剤師実務実践研究に取り組んでいます。



薬学科　衛生分子毒性学分野

※教授　吉成浩一　　※准教授　志津怜太
※助教　大岡央　　※助教　鈴木祥菜

HP▶ https://w3pharm.u-shizuoka-ken.ac.jp/eisei/

国民衛生向上と創薬に向けた化学物質の安全性科学

医薬品、化粧品、農薬、食品添加物など、現代人は様々な化学物質を利用しています。また人々は環境汚染物質にも曝されています。そのため、人々の健康を守るためには、これら化学物質の生体影響や体内動態、安全性を理解することが重要です。私たちは、化学物質の解毒に重要な薬物代謝酵素、ならびに細胞内異物センサーとして化学物質の生体応答を制御する核内受容体に着目し、化学物質の解毒・毒性発現機序や感受性要因に関する研究、毒性の評価・予測手法の開発、肝障害の予防・治療法の確立などに取り組んでいます。

薬学部　講座・研究分野

注 ※印　大学院薬学研究院教員兼務

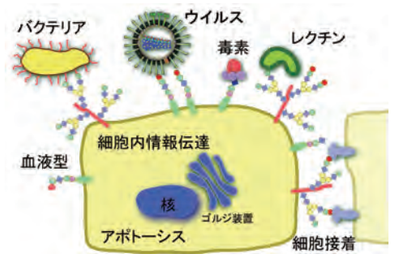
薬学科　生化学分野

※教授　竹内英之　　※准教授　高橋忠伸
※講師　紅林佑希　　※助教　塚本庸平

HP▶ https://w3pharm.u-shizuoka-ken.ac.jp/biochem/

糖鎖による生命のコミュニケーションを探る

高等生物から微生物やウイルスに至るまで、全ての生物はその細胞表面に糖の鎖 (糖鎖) を持っています。あらゆる細胞が纏う糖鎖の理解は、生命の統合的理解に必須です。私たちは、興味深い生命現象、特に、発生や幹細胞機能を制御する Notch シグナル伝達、ウイルス感染症や癌のような病気、記憶などの神経機能における糖鎖の役割を、生化学・細胞生物学・生理学的手法および質量分析技術を用いて探究しています。さらに、健康長寿社会の実現を目指し、研究成果をオリジナルな革新的創薬へと応用します。



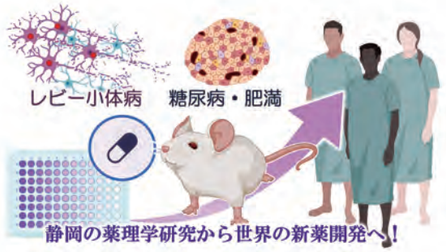
薬学科　薬理学分野

※教授　川畑伊知郎　　※准教授　木村俊秀
※講師　金子雪子　　※助教　山口桃生

HP▶ https://w3pharm.u-shizuoka-ken.ac.jp/pharmaco/

脳と体の未踏領域に挑み新薬を創製する

薬理学は、薬と生命の相互作用を論理的に解明する薬学の核心的な学問です。当分野では病気のしくみを明らかにし、新規治療薬の創製基盤を構築することで、病態解明から治療開発までのノンストップ研究教育を展開します。具体的に、レビー小体病などの中枢神経疾患から糖尿病などの末梢代謝疾患まで、ヒトの全身を網羅的な研究ターゲットとしています。細胞、生体、臨床レベルで脳と末梢の両面から生命現象の真理に迫り、その治療応用と実用化を通じ、次世代の薬剤師・薬学研究者の育成を行っています。



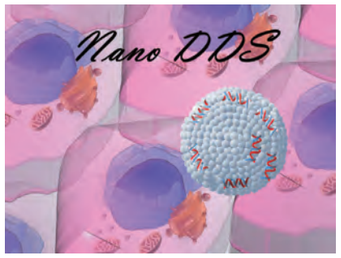
薬学科　医薬生命化学分野

※教授　浅井知浩　　※准教授　小出裕之
※講師　米澤正　　※助教　疋田智也

HP▶ https://w3pharm.u-shizuoka-ken.ac.jp/radiobio/

生命科学の進展を創薬に繋げるためのナノDDS研究

超高齢社会を迎え、がんや脳虚血性疾患などの難治性疾患に対する治療法開発が益々重要になっています。当分野ではドラッグデリバリーシステム（DDS）技術を基盤として、治療満足度の低い難治性疾患に対する新薬の開発を目指し、日々精力的に研究を行っています。特にナノDDS技術（新規の脂質ナノ粒子やポリマーナノ粒子等）を応用した低分子薬物や核酸の標的化送達研究に力を入れています。産官学連携と異分野連携を積極的に推進し、多角的に研究を発展させることで、社会貢献と次世代を担う人材育成を行っています。

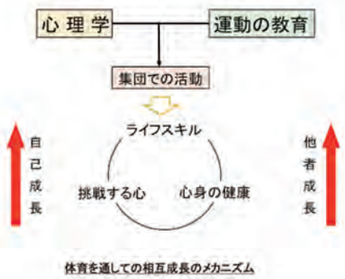


薬学科　身体運動科学分野

准教授　窪田辰政

体育をツールに生きる力を養う

健康の維持・増進や、社会環境へうまく適合するための知識やスキル、身体活動による心理的効果などについて研究・教育しています。授業では成功体験を多く育む環境作りに努め、心身の自己管理能力に優れた学生の育成や、自信を育むツールの1つに「体育」を活用できる授業実践を目指しています。



薬学科　科学英語分野

※准教授　ホーク フィリップ（Philip HAWKE）

HP▶ https://w3pharm.u-shizuoka-ken.ac.jp/sci-eng/

科学分野の英語コミュニケーション能力の向上をめざして

科学の国際化に伴い、薬学を専攻する学生にとっても、英語の重要性は高まっています。本教室の授業では、学部生は、大学の研究活動のためだけではなく、より高度な知識を持った薬剤師になるために必要な科学基礎英語を身につけることができます。また、大学院生は、独自の研究成果をまとめ上げるために、より専門的な科学英語を習得することを目指します。この授業を履修した多くの県大生が世界の舞台で活躍しています。英語による科学コミュニケーションは、あなたが思うほど難しくありません。
Join us and see how quickly your English can improve!

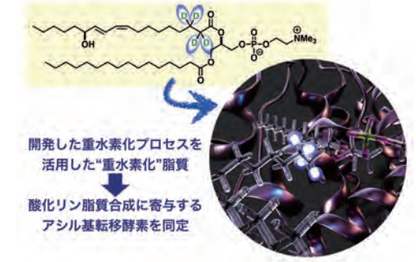
薬学科　医薬品製造化学分野

※教授　滝田良　　※准教授　吉村文彦
※助教　近藤健　　※助教　緩鹿創太

HP▶ https://www.us-yakuzo.jp

未踏の反応性と夢の分子機能を求めて

「科学」における「化学」の最大の特徴は「ものづくり」、すなわち「この世にないものを作り出せる」点です。わたしたちは、元素・結合・反応場などを中心とする反応性開拓を土台として、創薬科学や生命科学に資する次世代分子設計基盤の構築を目標としています。実験化学と理論計算の協奏による分子の精密設計と深い理解によるアプローチを基盤として、未踏の反応性・物性・機能を追求します。また、異分野との連携・密接なリンクを重視し、望みの分子機能の獲得を目指します。



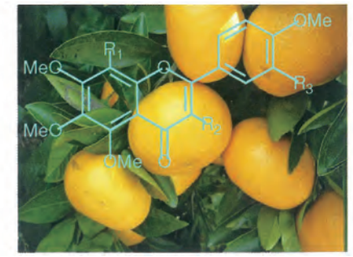
薬学科　生薬学分野

※教授　渡辺賢二　　※准教授　佐藤道大
※助教　渡邉正悟

HP▶ http://sweb.u-shizuoka-ken.ac.jp/~kenji55-lab/

自然と対話しつつ、物質と情報を組織化する学問

古来ヒトは動植物や鉱物に医薬を求め「病と死」に対抗してきました。その知識や技術の体系を統括するのが生薬学です。今日その範囲は山海経にあげられている「もの」を超えて、自然界が有用な物質を生み出す「仕組みそのもの」を学び、改変して、新規化合物を合成する方法論に挑戦しています。一方身近な果物や蔬菜の類にまで、様々な機能が喧伝される時代です。緑茶のカテキンを多成分系としてFDAが認可する時代でも、活性本体を効率良く単離し、的確に構造決定する、その腕を磨いています。



薬学科　生体機能分子分析学分野

※教授　轟木堅一郎　　※准教授　兒島憲二
※助教　古庄仰

HP▶ https://w3pharm.u-shizuoka-ken.ac.jp/analchem/

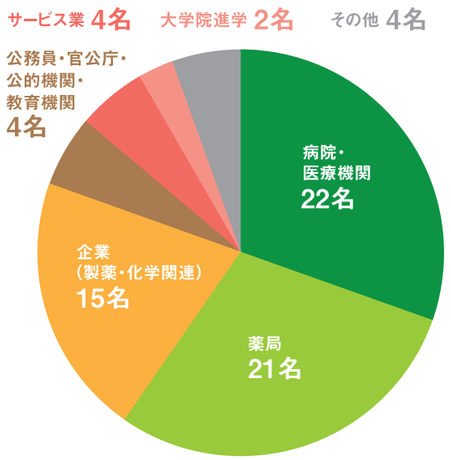
新たな「ものさし」の開発を通じ、生命科学や医療に変革をもたらす!

生命現象を詳細に理解するには「測る」という操作が必要不可欠です。何が、何処に、どれだけ、どのような状態で存在するかを調べることで、健康や病気に関する様々な情報が得られます。私達はユニークなアイデアと最先端の分析機器を駆使し、(1)これまで測れなかったものを測定可能にする、(2)これまで測れていたものをもっと高感度に、簡便に測定するための分析法開発を行っています。我々の分析法は各種疾患の早期発見や再発予防、薬効評価、さらには新薬開発に繋がると考えています。

令和7年度卒業生・修了生の進路状況

薬学部

薬学科卒業生　72名

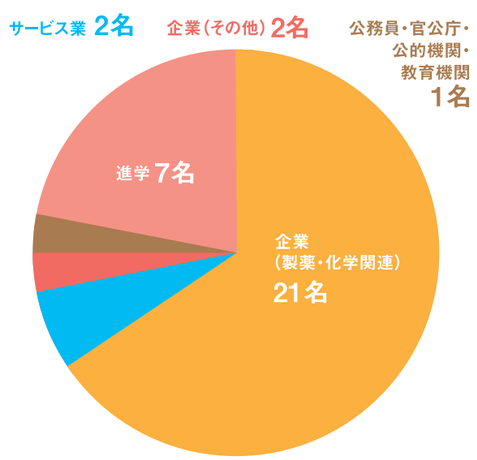


薬科学科卒業生　37名

大学院34名、企業（その他）1名
学術研究、専門・技術サービス業1名
大学進学1名

薬食生命科学総合学府 薬学研究院

博士前期課程修了生　33名



博士課程・博士後期課程修了生　3名

企業（製薬・化学関連）3名

主な就職先（過去5年間）　https://w3pharm.u-shizuoka-ken.ac.jp/index.php/graduates-main

病院・医療機関

京都大学医学部附属病院、国立病院機構、静岡県立静岡がんセンター、静岡県立病院機構、静岡済生会総合病院、
静岡市立静岡病院、静岡市立清水病院、静岡赤十字病院、聖隷福祉事業団、中東遠総合医療センター、
東京都立病院、名古屋大学医学部附属病院、浜松医科大学医学部附属病院、浜松医療センター、
富士市立中央病院、横浜市立大学附属病院、横浜市立みなと赤十字病院、他

薬局

I&H、アインホールディングス、ウエルシア薬局、うさぎ薬局、杏林堂薬局、クリエイトSD、クスリのアオキ、
スギ薬局、たんぽぽ薬局、ツルハ、日本調剤、ファーマライズ、富士薬品、マツモトキヨシ、わかくさ調剤薬局、他

企業（製薬・化学関連）

旭化成、アステラス製薬、アストラゼネカ、エーザイ、大塚製薬、小野薬品工業、科研製薬、キッセイ薬品工業、協和キリン、
グラクソ・スミスクライン、興和、JCRファーマ、塩野義製薬、シスメックス、住友ファーマ、生化学工業、ゼリア新薬工業、第一三共、
大正製薬、大鵬薬品工業、武田薬品工業、田辺三菱製薬、中外製薬、東和薬品、日本イーライリリー、日本新薬、バイエル薬品、
ファイザー、Meiji Seika ファルマ、持田製薬、ヤンセンファーマ、久光製薬、他

公務員・官公庁・公的機関・教育機関

大阪府（薬剤師）、静岡市(薬剤師)、静岡県（薬剤師）、千葉県（薬剤師）、特許庁、長野県（薬剤師）、他

薬剤師国家試験合格率

令和8年2月に実施された薬剤師国家試験(第111回)において、
本学の合格者数は69名(新卒者65名)、合格率は80.23%(新卒者90.28%)でした。
なお、全国平均の合格率は68.49%(新卒者86.25%)でした。

卒業生から皆さんへ　Messages from alumni.

立命館大学薬学部教授
平成2年卒業
小池千恵子 さん

新世代医療への貢献を目指して

温暖な静岡の地で受けた研究教育を経て10年以上基礎研究に従事し、再度薬学部に戻りました。現在は再生医療で注目されている網膜について、分子から機能レベルまでの階層横断的研究を行い、学際的研究を進めるシステム視覚科学研究センターを設置し視覚再獲得に向けた研究推進を行っています。医療の進歩に貢献するための多角的な知識を薬学部では学ぶことができます。目覚ましく進展する科学の進歩に貢献してみませんか?

花王株式会社ファブリック&ホームケア
研究センター　ハウスホールド研究所
平成16年卒業
山田美穂 さん

仕事も育児も充実した人生を目指して

男女平等、とは言っても女性には出産という大きな役割があります。子育てしながら仕事を続け、自分らしい人生を歩みたい、そんな想いはありませんか?私は現在、花王株式会社の研究開発職につきながら第三子の育児休暇を取得中です。3度の長期休暇取得に対応できる職場に感謝しながら日々子育てを楽しんでいます。自分の市場価値を決めるのは若いころの自分です。皆さんも今を楽しみながら、明るい未来を切り開いてください!

EAファーマ株式会社　創薬研究所
テーマ創出推進部 テーマ推進グループ
平成18年卒業
鶴田敦 さん

新薬・新発見を求めて

大学で過ごした楽しい学生生活、やりがいのある学生研究。今考えれば、そのすべてが自分の可能性を広げることのできた貴重な時間でした。そんな充実した時間の中で、私は薬を創りたいと想うようになり、現在、製薬会社で薬物動態のチームに所属しています。他部署との関わりが多く、様々な専門知識が求められる中、薬学部で学んだ幅広い知識、研究手技は力強い武器となっています。皆さんも是非充実した学生生活を送り、自分の可能性を広げてみてください。

医薬品医療機器総合機構（PMDA）
審査マネジメント部 薬事戦略相談課
平成27年卒業
小林香美結 さん

革新的な医療の種を育てる

日々、薬学は非常に柔軟な学問だと感じています。私はPMDAで新たな医薬品・医療機器・再生医療等製品のシーズの実用化をサポートする業務を行なっています。化合物から機械、細胞まで幅広い製品を扱いますが、どの分野でも薬学の知識・経験が活用出来ると同時に、医薬品だけでなく、医療の様々な分野に薬学部生の活躍の場があると感じます。学生生活を通じ、自分の進む道を切り開くことの出来る力を育まれることを期待します。

日本新薬株式会社 創薬研究所
探索研究部 探索化学グループ
平成28年卒業
浅田純司 さん

0から1を生み出す研究

ひとことで「新薬開発」と言っても研究内容は幅広く、化学・薬理学・動態学・製剤学等など多岐に渡ります。私はその中でも0から1を生み出す創薬化学の魅力に惹かれました。そして大学の研究室では、化学の知識や実験手技など研究者の基礎となる部分を学びました。創薬化学研究者となった今では、自分が合成した化合物が薬となることを願って日々研究をしています。新薬開発に興味があるなら、是非研究に挑戦してみて下さい。

京都大学医学部附属病院
薬剤部
平成30年卒業
石村裕樹 さん

成長を育む環境

大学病院では、高度な臨床現場に触れる機会に恵まれ、薬剤師としての専門性を磨きながら、研究や学生・後進の教育を通じて新たなことに挑戦しています。レジデント制度では、卒業後の早い段階で病棟業務を一通り経験し、志向を見極め、進路を選択できます。私は大学生活で良い環境や仲間との出会いが自らの成長に大きく寄与することを実感し、現在も志の高い仲間と充実した日々を過ごせています。皆さんも大学生活で新たな環境に積極的に飛び込み、人生を豊かにする出会いをぜひ探してください。

聖隷浜松病院
薬剤部
令和2年卒業
佐原由莉 さん

薬学を学び、自分の可能性を広げよう

病院薬剤師として働いてみると、薬剤師外来やカンファレンスへの参加など、これまで以上に薬剤師が活躍できる場が広がっていると感じます。答えが一つではない問いに答えなくてはならないこともありますが、そんな時に自分を助けてくれるのは、学生時代に友人と議論した経験や、疑問を解決しようと文献を読み漁った経験です。薬学は勉強すればするほど、広くも深くもできる学問だと思います。学生生活を通して色々なことに挑戦して、自分の可能性を広げていってください。

株式会社パナドーム
パナプラス薬局
令和3年卒業
安部由記 さん

1歩先の薬局づくりへの挑戦

私が現在働いている薬局では、治療の面だけでなく、人々の健康にトータル的にアプローチできるような事業展開を行っています。時代のニーズを捉えながら1歩先の薬局づくりをしており、常に先駆けてトライすることを求められる環境です。学生生活の中で培ったチャレンジ精神が今の環境に生かされています。成功も失敗も自らした経験は人生を豊かにしてくれます。皆さんも様々なことに挑戦して自分の可能性を切り開いてください。

キャンパスライフ

学びの舞台となる静岡県立大学薬学部の行事や施設を紹介

イベントカレンダー
EVENT CALENDAR

4 April
- 入学式
- 新入生歓迎行事
- 前期ガイダンス・健康診断
- 前期開始 ● 開学記念行事

5 May
- スポーツフェスティバル

6 June
- 研究室開放（3年生）

7 July
- 前期試験
- 研究室訪問（1年生）

8 August
- 夏期休業開始
- オープンキャンパス
- ファーマカレッジ
- 海外語学研修
- 大学院入試（一次募集）

9 September
- 夏期休業終了
- 集中講義
- 秋季学位記授与式（大学院）
- 後期ガイダンス

10 October
- 後期開始
- 剣祭（大学祭）
- 研究室配属（3年生）

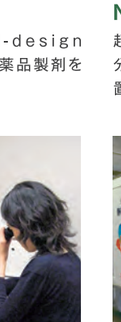
11 November
- 防災訓練
- 卒論発表会（薬学科）
- 研究室訪問（2年生）

12 December
- 集中講義
- 冬期休業開始
- 留学生交流会

1 January
- 冬期休業終了
- 薬学講座

2 February
- 後期試験
- 卒論発表会（薬科学科）
- 卒論中間発表会（薬学科4年）

3 March
- 学位記授与式
- 春期休業
- 海外語学研修
- 大学院入試（二次募集）



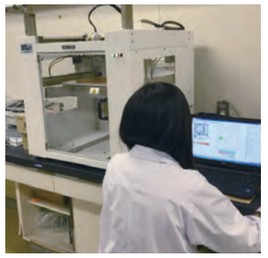
大学祭「剣祭（つるぎさい）」

10月に2日間にわたり草薙キャンパスで開かれる剣祭では、学生による模擬店が多数出展するほか、野外ステージでのライブや、クラブ・サークルの展示・発表などが行われます。学生だけでなく、他大学、高校、地域の方々など子どもから大人までが楽しめるお祭りです。また、薬学部では研究室開放を行い、研究内容を紹介しています。

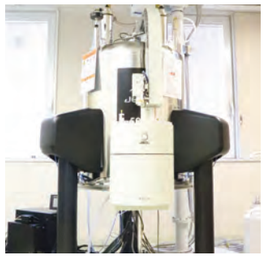
最先端の施設と設備

高性能の実験・分析機器を多数そろえ、最先端の科学・医療研究・技術開発をサポート

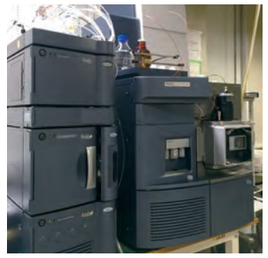
グローブボックス
アルゴンなどの不活性ガス下で、空気や水に不安定な物質を秤量したり、反応させたりするための装置です。



3Dプリンター
Computer-aided-design（CAD）データを基に医薬品製剤を造形する装置です。



NMR（核磁気共鳴装置）
超伝導磁石がつくりだす磁場を用いて分子の水素や炭素核の様子を調べる装置で、構造分析に利用されています。



UPLC-TOFMS
高速液体クロマトグラフと高分解能質量分析計を組み合わせた装置で、混合物中の不安定な微量化合物の構造決定や定量分析に利用されています。

中圧分取液体クロマトグラフ装置
自動で合成物や抽出物の精製を安全に行う装置です。有機合成・生化学などの幅広い分野にて使用されています。

共焦点レーザー顕微鏡
レーザー光線を用いて、細胞内物質の挙動・分布を三次元的に画像解析する装置です。厚みがある試料において、従来の顕微鏡よりも鮮明なイメージが得られます。

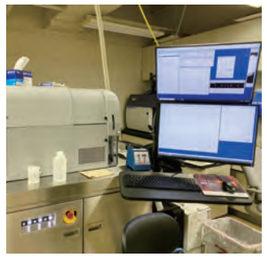
モバイルファーマシー
移動可能である在宅医療移動車の利点を生かして、大規模災害発生時の救護所における調剤業務支援および医薬品等の供給支援に活用されます。

薬学教育・研究センター
県立総合病院内に開設された薬学教育・研究センターは、実践的な臨床薬学の教育や研究が行われています。

薬草園
敷地面積は4000㎡で、113科約450種の植物を栽培しており、温室・実験室なども設備しています。

模擬薬局
臨床現場で使われている調剤機器や薬剤があり、実務事前実習で臨床実習に必要な知識や技能、態度を学びます。

動物実験センター
実験に使用するマウスやラットなどの動物を、空調完備のクリーンな環境で飼育しています。



セルソーター
蛍光標識などを利用して、目的の細胞だけを高精度に分離・回収する装置です。免疫学や再生医療、がん研究など、先端的な生命科学研究に幅広く活用されています。

薬学部の多彩な活動

薬学講座

「薬学講座」は全教員・学生を対象に開催され、製薬企業の新薬開発の第一線で活躍されてきた研究者、あるいは薬害問題の解決に向けて闘ってこられた専門家に講演して頂いています。講演後には学生からいくつもの質問が出て、活発な議論となる事もしばしばです。

生涯健康サイエンスフェス

「生涯健康サイエンスフェス」は、県内大学と連携・協力し、「生涯健康」に係る研究内容を情報発信するために開催されています。健康・長寿に関する第一線級の学術情報が発表され、その成果は静岡から世界に広く発信されています。

一次救命処置教育訓練プログラム

アメリカ心臓協会(AHA)認定の心肺停止時一次救命処置(BLS)コースを静岡県立大学にて開催し、薬学部の学生がコースを修了しています。彼らはBLSヘルスケアプロバイダーとして、地域社会の保健・医療・福祉に関連するチームケアを牽引していくことが期待されます。

国際学術交流

バンドン一静岡食薬カンファ、静岡県立大学・コンケン大学医学薬学ジョイントシンポジウム、日中健康科学シンポジウム、国際医療研修(アリゾナ大学、ワシントン大学)など多くの国際学術交流が薬学部や薬学部教員主催で行われています。

国際交流協定校

アリゾナ大学、カリフォルニア大学デービス校(米国)、マヒドン大学、コンケン大学、チュラロンコーン大学、スラナリー工科大学、タマサート大学(タイ)、マッセイ大学、リデット研究所(ニュージーランド)、杭州医学院、延辺大学(中国)、マラヤ大学(マレーシア)、バンドン工科大学(インドネシア)、チュンナム大学校(韓国)、ラジャヒ大学(バングラデシュ)など、国際交流協定校との教員や学生の交流が低学年での語学研修、オンライン国際交流学習(COIL)等を通じて、積極的に行われています。

国内外の学会で受賞

学生の研究成果は国内外の学会で発表されます。優秀な発表に対して贈られる賞などを、多くの学生が受賞しています。とくに日本薬学会年会では毎年多くの学生が優秀発表賞を受賞しています。

卒後教育

主に卒業生を対象とした生涯研修講座を薬学部同窓会(静薬学友会)と共催しています。また東海地区公立大学薬学部連携の薬剤師生涯学習講座や薬物療法研修会、静岡県薬剤師会との共催研修会などが開かれ、薬学部の学生に対して薬物治療の実地教育を行うとともに、薬剤師の生涯学習に貢献した活動がなされています。

薬学部Q&A

Q 薬学部の教育目標は何ですか?

A 4年制の薬科学科では、大学院博士前・後期課程と連携して創薬科学および生命薬学の研究領域でグローバルに貢献でき、指導的役割を担える人材の育成を、また6年制の薬学科では、医療や健康増進に貢献する指導的立場の薬剤師や医療薬学に根ざした研究を推進できる人材の育成を目標としています。

Q 4年制薬科学科と6年制薬学科では進路に違いがありますか?

A 4年制薬科学科の卒業生は、ほぼ全員が大学院に進学し、修士号や博士号を取得した後、製薬・化学企業などで創薬・生命科学関連の研究・開発に従事しています。6年制薬学科の卒業生は、病院、薬局、官公庁などに薬剤師として従事するほか、製薬企業で開発・研究に従事したり、大学院に進学します。

Q 奨学金制度について教えてください。

A 本学独自の奨学金制度のほか、日本学生支援機構、地元企業等による奨学金制度もあります。詳細については、静岡県立大学の授業料・奨学金ウェブサイト https://www.u-shizuoka-ken.ac.jp/campuslife/tuition-scholarship/ をご覧ください。

Q 薬学部の特徴は何ですか?

A 本学部は、1916年の静岡女子薬学校開学以来の全国でも有数の歴史を誇る薬学部です。本学部の特徴は薬科学科および薬学科のどちらの学科でも研究能力の醸成に力点を置いていること、また100%の就職率を継続して達成していることです。創薬および生命薬学研究では、大学院附置施設の創薬探索センターや薬食研究推進センターを活用することができます。また、医療薬学領域では、静岡県立総合病院内に「薬学教育・研究センター」を設け、臨床教育と臨床研究の両立を達成しています。学生の修学上や生活上の相談や悩み事には、アドバイザー制度が充実しており、担当教員といつでも個別に相談ができます。卒業生組織(静薬学友会)による支援活動も充実しており、進路相談や海外研修援助などを行っています。

Q 6年制薬学科における病院実務実習はどのように行われますか?

A 病院実務実習は、主に静岡県立総合病院に設置した「薬学教育・研究センター」に常駐する臨床経験豊富な専任教員の指導の下、静岡県内の医療機関の協力を得て実施しています。本学部の米国型病院実務実習体制は画期的で、全国的に注目を浴びています。

2027年度(2026年度実施)選抜情報

入学者選抜試験日程

一般選抜

○公立大学中期日程
受付期間:2027年1月25日(月)から2月3日(水)まで17時必着(郵送のみ)
試験日:2027年3月8日(月) 合格発表:2027年3月21日(日)

特別選抜

○推薦(共通テスト課す)
受付期間:2027年1月20日(水)～1月26日(火)
試験日:2027年2月6日(土)
合格発表:2027年2月10日(水)

○推薦(共通テスト免除)
受付期間:2026年11月2日(月)～11月9日(月)
試験日:2026年12月1日(火)
合格発表:2026年12月10日(木)

○帰国生徒
受付期間:2026年9月24日(木)～9月30日(水)
試験日:2026年12月1日(火)
合格発表:2026年12月10日(木)

○私費外国人留学生
受付期間:2026年12月22日(火)～2027年1月7日(木)
(12月26日～1月3日を除く)
試験日:2027年3月8日(月)
合格発表:2027年3月21日(日)

募集人員

学科	募集人員(人)				
	一般選抜	特別選抜			
	公立大学中期日程	学校推薦型選抜		帰国生徒	私費外国人留学生
		共通テストを課す	共通テストを免除する		
薬科学科(4年制)	26	7	7	若干名	若干名
薬学科(6年制)	54	13	13	若干名	若干名

※詳細については募集要項(https://www.u-shizuoka-ken.ac.jp/admissions/)を必ずご参照ください。▶

薬学部 オープンキャンパス2026

スケジュールおよび内容やお申し込み方法等の詳細は、以下のアドレスをご覧ください。
https://www.u-shizuoka-ken.ac.jp/admissions/opencampus/ ▶

<入試に関するお問い合わせ先> 〒422-8526 静岡市駿河区谷田52−1 静岡県立大学学生部入試室
E-mail: nyus@u-shizuoka-ken.ac.jp tel.054-264-5007 fax.054-264-5199